

演題:レオナルドとパチョーリ

田中先生のプロフィール

東京大学仏文科、美術史学科を卒業後、ストラスブール大学に留学、文学博士である。現在は、東北大学名誉教授、国際教養大学特任教授、国際美術史学会副会長。日本におけるヨーロッパ美術史研究の第一人者として、世界各地の学会で活躍。ラ・トゥールやダ・ヴィンチの研究で世界的な評価を得る。システィナ礼拝堂の調査や、ダ・ヴィンチの「スフォルツァ騎馬像」の復元などでも中心的役割を果たす。近年では、西洋美術史研究で培った鑑賞眼と学識を武器に、日本美術史研究にも着手している。

はじめに

私は初め「美」を表現するために、画家や小説家になりたかった。しかし、1960年代はフランス文学やその思想を勉強した時代であり、そこで青春を過ごしたため、美への追求が生涯のテーマとなりました。そのため、文学からみた美術史を専攻しました。美術史は歴史であるため、美術作品に比して軽く見られがちですが、身近にあるので誰でも接近でき、美術館やオペラ劇場、そして教会に行けば見られます。旅行中に関心があれば立ち寄って芸術に触れることも可能です。しかし、その芸術を総合的に学問的にするのが美術史です。

パチョーリはたまたま数学者であり、複式簿記と関連して「近代会計学の父」と呼ばれているが、どんな人だったのか、彼の理論については知識がないために話せませんが、会計やお金とは違った美の世界をこれからお話しすることで感じていただければと思います。

パチョーリとダ・ヴィンチは、1496年にミラノで出会う。兩人ともフィレンツェ出身だが、ダ・ヴィンチはヴィンチ村のレオナルドということはみなさんご存知で、そのヴィンチ村はフィレンツェから北に30 kmほど行った小さな町です。パチョーリもやはりフィレンツェから北に行ったボルゴ・サンセポルクロの生まれです。ついでにガリレオ・ガリレイなども、フィレンツェまたは北イタリア出身です。その頃のイタリアは、ヨーロッパの中心地でした。

私は、「美」を深く追求して、ローマに1年、フィレンツェに1年滞在し、その後も毎年のように訪れています。さらに、システィナ礼拝堂等の調査で10年くらい過ごしたので、イタリアは第二の故郷のような気がしています。

近代について

北イタリアがすごいと言われているのは、「近代」以前の話なのです。「近代」というのは、大衆や人口が多くなったときの呼称に過ぎない、というのがおおかたの近代の区切り方として考えられています。つまり、人口が増えると組織化が必要になってくる。これが近代です。産業革命は機械で大量生産をどんどんやり、そこで大量の労働者が必要となり、その後、労働意欲という観点からマルクス主義が生まれる。近代とは人口が鍵となり社会

をどう作るかによって、法律を作り、契約法を基礎とするようになり、大衆に平等の法律を与え、支配、統治、組織化し共同体を大きくする。そのため、近代が一番進んでいるという考えは、大衆を如何に社会がまとめるかということで出来上がった国家、近代性というのは非常に物理的な問題に過ぎないわけで、それを進んだように思い込んだ、これが近代化といえる。ヘーゲルやマルクス等が説明した「近代」となり、始めて人間が自由になったというが、芸術の観点からすれば、近代とはつまらない芸術ばかりが増えたという興味深い現象が起きました。

特に現代芸術は破壊ばかりしている。ピカソは三次元や写実で描かれた破壊というテーマを二次元的に、そして幼稚に描いてしまう、キュビズムのピカソがよい例です。また、マンセル・デュシャンは従来の絵画や彫刻という形式に当てはまらないレディ・メイド（既製品）という芸術形式を提起しました。例えば、使用できない便器を作り、つまり何も意味がないというのを芸術としました。この芸術が 20 世紀の特徴です。破壊と破壊主義がくっつき、政治的前衛と芸術的前衛がくっついて、20 世紀というのを作り出した。つまり、破壊しかない。リベラルという言葉は、破壊しよう、自由にしようという意味があり、歯止めが利かなくなれば破壊するというアナキズムとなります。

マスメディア戦略

20 世紀という世紀は、それだけ多くの人々が小さくまとまって生きるということに対する対応にしか過ぎなくて、人間性というのはある意味、機械化していることもあり、個々人の自由や個人主義だと思っているものは、画一的で同じような考え方しかできないようになってしまった。

マスメディアも情報も全部統一され、平気でどこからも同じ情報しか流さない。戦後の特色として、マスメディア戦略は左翼化している。今までは、労働運動だったが、今ではメディア戦略が主力となり、中間階級の意識を如何に変革させるために、あらゆるメディアを使って左翼化する。またそれを、気がつかずにやるのがメディア戦略である。なぜ近代と現代の芸術はつまらないのだろうというところから始まり、社会考察をするとそこにはメディア戦略という、情報統制がある。マルクスは、文化なんていうのは上部構造であり、どんどん変化するものなのでどうでもよく、経済は下部構造であるため大事であるといった。また、上部構造というのは精神的なものだから、変わっていくし、そうなると、文化は死滅するしかなくなる。ソ連の社会主義の文化からは新しい創造は生まれてこない。

日本の文化に対する予算は、余ったらやるようなもので、文化庁の予算は東北大学の予算より少ないものとなっている。日本は酷い文化政策をやっている。文化というのは「どうでもよいもの」という考え方が近代である。本来人間は文化が中心で、日本には特有の食文化や住居文化である畳文化、靴を脱ぐなどの文化がある。文化が政治や宗教を作っているものであり、その結果、神社や仏閣か日本では機能している。そして、お祭り等で文化活動を継承し、例えば祭りは毎日行なっているが、メディアはそれを時間が余ったら放送する程度である。このように、マスメディアでは上部構造を放送し、下部構造である文化活動を一貫として放送しない。

科学と芸術

パチョーリの会計学は下部構造的な唯物論的なところだが、レオナルドは芸術という上部構造的であるため、その 2 人が如何に芸術的問題を嗜なみあっているところに興味を持った。つまり、科学・数学と芸術は一緒の時代であり、パチョーリという下部構造的な人物と、レオナルドという上部構造的な人物、この 2 人が如何に仲よかったかという問題である。なぜなら、近代以前というのは科学・数学と芸術とが一緒になっていた。今日の画家は理科系ではない。けれどもレオナルドは理科系の人間であった。この頃の芸術家はプラトンのものとアリストテレスのものを両方持ち、科学者と芸術的な普遍的人間で素晴らしい総合的人間が芸術家であった。近代が文科系や理科系というように区別したのである。近代ができ、大学というものができ、そこで学部という区別が発生したため専門家が増えた。しかし、人間は本来どちらの性質も持っているものである。

近代以前は、理科系も文科系もない。そこに囚われているのは自分の能力を貶めていることである。レオナルドを見ていると総合的に考えていて、本来の人間像が見える。普段から上部構造的な考えを持ち行動する。レオナルドは 1452 年に生まれて 1519 年に亡くなり、パチョーリは 1445 年に生まれ、1517 年に亡くなっているため、二人は同じような時期に生きている。この時代のイタリアの芸術はすばらしい。文化と芸術は同列なものだが、芸術が文化を作っていた。芸術には質的な問題があり、質の高さが優劣を決める。チェーホフが芸術に哲学を持ち込んでから、宗教絵画というものだったのが、人間性の芸術になった。芸術は 15、16 世紀から人間の芸術になる。なぜなら、プラトニックが含まれてくるからである。

フィロソフィア

プラトンは人間性の、キリスト教以前の宗教以前の哲学であるから愛がある。男女の愛というのではなく、フィロソフィアという智を愛する、智と結婚する。そういう意味ではフィロソフィアという愛は男性愛という、例えば少年愛の方がよい。なぜなら、肉体関係がないため、愛と言うエゴイズムがなくなる。

人間とは全体の共同性に個々のエゴイズムを超えたものだから、そこにフィロソフィアという言葉が出てくる。智を愛する人が人々を大事にし、国家を作る。その人たちが中心となり、エリートとなって国家を作る。しかし、現在のエリートはフィロソフィアではないため、民主主義という凡庸な人が集まり、全体を考える上では勉強をしなければならないが、勉強しない政治家が国を動かしている。感受性を高めなければ凡庸な国家しか作れないということを、すでにプラトンは国家論で述べている。そして、智を愛するとは人間の基本で、フィロソフィアが国家の中心となることを、15～16 世紀にもう一度発見された。それを後援するのはメディチ家であり、3 代目の当主ロレンツォ・デ・メディチは詩人だから、文化的なことを良く知っている。自ら詩を書いて、ミケランジェロ等を育てる。自分の家に招いて育てる。今の政治家が考えもつかないようなことをやる。なぜなら、人口が少ないから出来る。

ミラノ

この頃の人口は十万くらいで、ほとんど顔見知りのようなもので、そういうところに天才が出現すると噂は広がりやすく会いやすい。例えば、東京はこれだけ人口がいても誰にも会えないが、仙台にいたころの方がはるかに人に会えた。人口が少ない方がかえって文化が進む、芸術が進む、議論ができコミュニケーションがうまくいく。レオナルドにとってみれば、有名な芸術家がいるフィレンツェよりも、ミラノに行けば宮廷画家になり活躍できる。当時ミラノはオーストリア、ユーゴスラビア、フランス、スペインから、またイスラム教徒が強かったために、そこから狙われるため軍事都市であった。そのため、軍事的に立派な城が必要となり、スフォルツァ家やヴィスコンティー家は傭兵隊長であった。スフォルツァ騎馬像は傭兵隊長のロドヴィコ・イル・モロだった。このような大きな騎馬像を作る芸術家がミラノにはいない。そのため、フィレンツェから呼ぶ。そして、スフォルツァ家はデル・ヴェロッキオ工房の30歳にならない若くて才能のあるレオナルドを宮廷画家として呼び、素晴らしい傑作を作らせて育てる。

パチョーリ

パチョーリもウルビーノからすごい年俸で大学の教授として呼ばれる。文化が政治や経済を動かす。宮殿や教会を作ることが目的のため、芸術家は呼ばれて建築も彫刻も作る。また、日本も飛鳥時代にイタリアと同じことがあった。世界一のブロンズ製大仏を作った。レオナルドがブロンズを作る千年も前である。日本のことを無視しているわけではないが、イタリアのその当時の文化は芸術が基本であるため、レオナルドはスフォルツァ家が、ミケランジェロはメディチ家が、ティツィアーノはハプスブルク家等の宮廷がこれらの芸術家を迎えて貴族扱いしていた。日本でも同様に芸術家(きみまろ)を高い地位として扱っていた時代があった。

近代がいかにお金の社会になって、細分された専門化したために、すべてが機械化して、つまらなくなっている。そういうことで破壊しかしていないのが現代の美術である。パチョーリは『スママ』を執筆した。特に『神聖比例(ディヴィナ・ポロポルチオーネ)』が1509年に出版され、パチョーリが発見したというよりも一般向けに手を加えたその当時の知識をまとめた著書である。複式簿記も当時使われていた知識をまとめ、具体的に書いたのが『スママ』である。パチョーリが執筆した『神聖比例』は、ギリシャの幾何学を取り込み執筆された。そして、幾何学はイスラム文化から生まれたものである。このように、ルネサンスの時期は、イスラム文化をラテン語に訳し、それが古典学であり、そのため、幾何学が重要視されてきた。つまり、パチョーリが執筆した『神聖比例』も元々はイスラム文化で考えられたものだった。そのため、幾何学というのが重要視されてきた結果、イスラム文化の古典学に触れることとなった。

レオナルド

レオナルドの母は、アラビア人でないかという説が2、3年前から出ている。指紋が出てきたが、それがどう見てもアラビア人でしかない指紋だった。公証人の父がヴィンチ村に来たときに、召使か何かで雇われていたアラビア系の女性に産ませてしまったのがレオナ

ルドであるといわれている。そのため、レオナルドはアラビア的な知識や思考の持ち主であったためキリスト教を心酔していない。当時の芸術家とは少し違った精神を持ち、神よりも自然を非常に大事にしていた。神が自然を作ったという宗教的思考ではなく、自然が神を作ったという考え方が強かった。そのため、レオナルドにキリスト教徒ではない考え方が体質としてあるのかもしれない。

私の持論は、レオナルドは西洋的な考え方でなく、東洋的な考え方をもっている、ということだ。なぜならモナリザの背景が、全部中国の山水画であるからである。この説は突飛かもしれないがレオナルドが東洋文化に触れた可能性がある。また、当時は絹織物等が西洋に入ってきた等、東西の交流が盛んだった。そして、レオナルドは様々な知識を得ようとし、パチョーリに接近したことは十分理解できる。パチョーリは『神聖比例』の第6章で、「最も威厳のある画家、遠近法、音楽家、すべての職を備えた画家フィレンツェ人レオナルド・ダ・ヴィンチ」と褒め称えている。また、2月9日にミラノ城内で開かれた「褒め称えられるべき学問的決闘」といわれる討論会でも、建築、発明、彫刻そして絵画にも精通している万能なレオナルドという紹介を受けている。このように、パチョーリもレオナルドを非常に評価している。また、『神聖比例』の挿図を全部レオナルドが手掛けている。この協力には数学的論証を得ていない限り、人間のいかなる研究も真の学問たる資格はないというレオナルドの持論がある。このように、全て数学的な何かがあるということのパチョーリから学ぶ。方形と円形の組み合わせである、「ウィトルウィウスの人体図」もここから出てくる。

この2人の関係が意味するように、数学者であっても芸術的なことも考えるのが素晴らしい。数学的知識がないことからそれを神が与えた黄金比率は19世紀に出来た言葉で、それまでは「神聖比例」という言葉を使っていた。「神聖比例」は神が創ったという比喻である。ルートの研究を学ぼうということで、レオナルドはルートの研究を行った。その上で、「神聖比例」に興味を持ち、その第1部では神聖比例の理論、第2部では正多面体の理論(黄金比率の適用)、最後の第3部では建築論を執筆し、建築も比例で考えなければならぬとしている。

イタリア人の美意識

イタリアでは建築は美しく、現代建築を許さない。ローマに行けば、東京やニューヨークにあるような高いビルが一切ない。それは、イタリア人が貧乏だからではない。サン・ピエトロがある限り、丹下健三のような現代建築は全然ダメだ。イタリア人はそういう環境にあるため、イタリア人の美意識では現代建築を許さない。現代建築は芸術性がないからパリのように郊外にも造らせないのである。ニューヨークの高層ビルや日本にある都庁等の高層建築は醜いという意識がイタリア人の多くにはある。日本人にそういう意識がないのは、戦後に植えつけられたアメリカニズムの洗脳で、伝統建築を現代建築が壊していき、その結果、合理性を求められると同時に人間性が失われていく。中国も上海もシンガポールもニューヨークも日本も現代建築は合理性がいいとして非常に人間性を失っていく。しかし、イタリア人は今まであった景観を、先人が残した建築を崩さないという頑固さが美意識の追求であり、アンチテーゼとなっている。ボローニャは丹下健三を呼んで現代建築

物を郊外に作らせたがそれほど大きなものではない。ポローニャの中央の景観を絶対に崩させない。そういう頑固な意識のイタリアは面白い。日本もそれをやるべきだったのだが、日本は敗戦国で、アメリカナイズ、ソ連ナイズされて、完全におかしくなり、日本建築が失ってしまった。

これからは、日本建築を破壊してきたことがおかしかったのだという反省期に入る時代だ。ソ連が崩壊し、社会主義の幻想もなくなったのだから、民主党や社民党が持っている意識はもう潰れて良いわけで、未来志向よりも伝統と文化をもう一度見直す方が遥かに主流となってきている。例えば、若い人はかえって保守的となり、浴衣等を着てお祭りへ行ったり、みこしを担いだり、そういうことは非常に重要で日本の伝統を継承しているが、政治は左翼化している。

パチョーリとレオナルドの関係というのは、「ディヴィナ・ポロポルチオーネ」の本の中で、レオナルドの仕事をパチョーリが見ているということが書かれている。レオナルドはスフォルツァ騎馬像、ミラノを統治するスフォルツァ家の三代前の偉大なる人物のモニュメント作成の依頼を受ける。レオナルドは画家であり、彫刻家だが、ミラノ公に提出した推薦状で、10項目内9項目には武器を作ることや完璧な城塞を作れる等を書き、軍事技師であることを売りにした。なぜなら、スフォルツァは戦争の名手で、軍隊を組織した傭兵隊長だった。今のような自衛隊の様な組織を率いる人物だった。彫刻や絵画を作らせ、レオナルドには歌や楽器を弾かせ、楽しいことはなんでもやる。

しかし、女性は受け付けなかった。この時期の芸術家は大体がホモだった。ミケランジェロ、ラファエロも同性愛者だった。仕事を愛する人は家族を作ったら時間が無駄である。しかし、結婚しないのは同性愛者というわけではなく、結婚すると仕事に犠牲が出てくる。近代は仕事好きな人も結婚して家族を持ち、それが常識かもしれないが、みんな平板化している。その代わり、近代以前は仕事がとても独創的で、フィロソフィアが生まれたギリシャ、紀元前の5、6世紀には最高の知識人を生んでいる。例えば、東洋では孔子、孟子、釈迦、西洋ではプラトン、アリストテレスがこの時期には出揃っている。そのため近代の思想家たちは比較するととても低い。近代はプラトンやアリストテレスの注釈を書いたに過ぎないと言われている。日本も飛鳥時代から鎌倉時代等を含め、素晴らしい芸術の国であるが、戦後そういった教育を受けてないため、あまりその重要さがわかっていない。江戸の後期に出現した北斎などもそうである。伝統は途絶えているわけではない。

騎馬像の再現

1960年代にマドリッドから出たレオナルドのマドリッド手稿の中に、パチョーリがレオナルドの仕事を観察していたということが書いてある。その仕事とは、地上から頭まで7.2メートルの高さであるスフォルツァ騎馬像の制作であり、71.5トンのブロンズを集められたと正確に書いてある。そして、1989年に名古屋市政100周年を記念して世界デザイン博覧会を開催した際に、東海銀行が10億円の資金を提供して、レオナルド館を作った。そこで、スフォルツァ騎馬像をFRPで作製した。パチョーリの記述である7.2メートルを重視した。それが、:現在唯一解体されずに名古屋の国際会議場の前にある。

パチョーリとレオナルドは数学上、『神聖比例 (ディヴィナ・ポロポルチオーネ)』で関

係を持つのだが、パチョーリがレオナルドの仕事を非常によく観察していた。1494年11月にロドヴィコ・イル・モロ(スフォルツァ家の三代目)は、ブロンズ像をつくるため集められたブロンズを、大砲を作るために送ってしまった。そのために、騎馬像を作ることを断念したことがパチョーリの記録に書いてある。71.5トン中57トンが騎馬の部分であり、パチョーリは馬の部分の粘土でできた像をみて、7.2メートルと記述している。レオナルドは平凡な人ではないため、後ろ足だけで立つ騎馬像をデッサンする。しかし、重みという問題が立ちはだかる。騎馬を作る際に、粘土の表面を削った逆さの騎馬に溶解したブロンズを流し込む。このようにブロンズ彫刻を作る。芸大には、コレオーニ騎馬像等の彫刻の原寸大の非常に優れたレプリカがある。戦前は原寸大のコピーが作れたが、今はできない。コレオーニ騎馬像はレオナルドがヴェロッキオ工房時代に作ったことが基本となり、スフォルツァ騎馬像を制作した。スフォルツァ騎馬像は後ろ足が一步出て、歩いている騎馬像の原型である。パチョーリがスフォルツァ騎馬像を見たときは、騎士がいなかった。この騎士を入れると、重くなり騎馬が立てなくなることが確実である。私は、騎馬の首が前に出ているところが、コレオーニ騎馬像との違いであることに気が付き、スフォルツァ騎馬像を作製する際には、このようなデッサンを彫刻家に見せ依頼した。彼らのいい勉強になったと思う。デッサン一つで独自なというか、単なる馬だが馬を超えた馬になる。馬がまるで神になったような感じがある。

ハンガリーのブタペストには、飛んでいる様な生き生きとした馬のブロンズ像があるが、とても小さい。これは作れるが、こんな生き生きとした馬は近代まで出来ない。これが7.2メートルの高さもあると、支え棒をしないと立たない。どうしても歩く姿にならざるを得ない。こういうものが、彼のデッサンにはたくさん出ている。奈良の大仏は周りに土をかぶせながら、溶解したブロンズを流し込んだが、馬の場合はそういうことができない。そのため、逆さにしてブロンズを注入するが、レオナルドはブロンズが大砲を作るために別の土地に送られてしまったため、結局できなかった。しかし、こういうことが基本となって騎馬像を作ることが可能だということがわかった。

レオナルドは左利きであり、デッサンや手稿は右から左に文字を書き、完全に逆さまに書き、人に見られたくはないという理由もあるが、母親がアラブ人ということもあり、アラブ語は右から左に書くため、それをまねしたという理由もある。デッサンはある人によれば1万点くらい書いたのではないとも言われている。こういうものを書いて売るというケチな感覚ではなく、書くこと自体が目的であり、デッサンについて考える。デッサンを発表することではなく、また、いくらで売ろうと考えたこともない。実際に、レオナルドのモナリザの絵でも、完成しても渡さない。準備金のための少額はもらうが、決して多額の完成後の報酬は貰わないし、それほど欲しくない。なぜなら、レオナルドは宮廷画家のため月給は貰っている。その辺も現代みたいに、お金のための製作はしないし、どんどん発表しないと忘れられるというものもない。この時代のすばらしさはそういうことにある。

その人の存在することそのものがとても大切であり、その人が発するオーラを見て感じて、若い人が刺激を受ける。この時代のイタリアの面白さは身近にすばらしい芸術家(他にもガリレオ、コペルニクス)がいたため、人間の生き様、文化、芸術を作る様子を至近距離で感じることができる。そういうことがイタリアではどんどん行われていた。

実際にはスフォルツァ騎馬像は FRP で制作したが、当時ではブロンズでの製作が計画されていた。しかし、自重で倒れてしまうということがわかった。そのため、倒れないように支え棒をするというのはとても醜いし、2本足で支えなくは美しくはない。考えれば粘土でも作れるし、ただ単純に小さくすればできる。ガリレオやニュートンのような解決策を考えるも、重みというのは落下の法則とは関係ないから、結局レオナルドは失敗してしまい、ブロンズで制作することを断念してしまう。そして、依頼者側からやめてしまう。

私はブロンズでは同じように作れないと思い、コンピュータで実際に計算してみると 1本の脚で支えるのは 6 トンほどというのがわかった。そこで、日本で開発された FRP という強化プラスチックという素材(大阪万博で岡本太郎が太陽の塔を作った素材)で、つまり非常に強化された、耐久性のある、FRP でスフォルツァ騎馬像をコンピュータで計測して制作した。顔もデッサンから単純に模写したのではなく、レオナルドもそれを望まないことから、戦う人、獐猛な顔をイメージして制作した。FRP なので、脚等のパーツはばらばらに作られ、途中で組み立て完成させた。こういう製作物に対してイタリア人はあまり好まない。レオナルドしか作れないし、現代人が作ってもしょうがないという感覚がある。しかし、非常に好評を受け、映画で使用されたり、イタリアの新聞にも載ったりした。また、日本の技術力の評価も得た。パチョーリが残念がっていた完成しなかった像をブロンズではなく、日本で FRP だが完成できたというのは感慨深いものがある。振り返ってみると完成したことは幸運でもあり、名古屋地方では、この像でいろいろな宣伝材料に使用された。パチョーリが見ていた像のデッサンを、復元できたことは私の誇りでもあるし、日本の技術力をレオナルドは苦笑しているかもしれない。しかし、FRP で完成させたということは非常に面白い。

日本の美再発見

私は『日本史の中の世界一』(育鵬社)を執筆した。その中で日本史の中にある世界一が 50 項目もあり、縄文土器のすばらしさやその芸術性から説明している。この本の中には、世界最古のブロンズ像、温泉宿等々、何気ないことだが世界に全くありえないものが日本にはたくさんある。イタリアは非常に面白い国だが、日本もそれに匹敵するくらい面白い国である。そういうことを執筆しているので是非、読んでください。

パチョーリという人の存在はレオナルドと似ていて、該博な知識を持ちながら同時に会計学にも精通した人であり、現代の一つの反省材料として、パチョーリやレオナルドのように小さくまとまらないような知識人を目指そう。

(2010 年 10 月 17 日拓殖大学文京キャンパス F 館 301 にて、全体で 93 分の録音を大学院後期課程吉川直希氏が原稿に起こし、三代川が校閲した。)

2011年10月吉日
日本パチョーリ協会
世話人代表 三代川正秀

日本パチョーリ協会第23回フォーラムについて

謹啓 秋深まる候、皆様におかれましてはますますご健勝のこと、お喜び申し上げます。

今年度のフォーラムは中世イタリア商業史を専門とされる斎藤寛海先生(信州大学特任教授)をお招きして、御講演いただけることとなりました。先生には第10回(平成10年)フォーラムで「中世後期のイタリア商業」のお話をいただいておりますので、御懇意にされておられる方も多いと存じます。ぜひご参集ください。

記

フォーラム開催日: 2011年12月10日(土)午後2時から4時30分
開催場所: 殖大学文京キャンパス C館七階ラウンジ(エレベーター7F)
報告者・演題: 斎藤寛海先生「ペゴロッティの商業実務とバドエルの元帳」
当日講演終了後、同じ会場で懇親会を開催いたします。
参加費・懇親会費: 別紙振込用紙記載の通りです(11月5日までにお振り込みください)。

◆西洋古書の老舗雄松堂書店のご厚意で、ユエグリッド著/パチョーリ訳注『幾何学原論』(1509年ヴェネチア)を当日展示していただく予定です(都合により展示ができない場合もあります)。ルカ・パチョーリは1508年にこの『原論』、『神聖比例』、『スムマ』など五書の印刷特権をヴェネツィア政府に申請し、15年の権利を入手するとパガニーノのトスコラーノ工房で印刷に取り掛かり、翌年5月22日に『原論』を、6月1日に『神聖比例』を刊行しています(雪嶋宏一「パチョーリとパガニーニ」文流『南欧文化』第16号)。この『幾何学原論』と『神聖比例』とはパガニーノ社のときを同じくした兄弟出版物でもあります。

◆過去二回のフォーラム内容をAAA誌に収録することができませんでした。

第21回 北大学名誉教授・田中英道先生(2009年10月17日 拓殖大学F館にて)

第22回 東京大学名誉教授・諸井勝之助先生(2010年6月5日 拓殖大学C館にて)

幸いに、第21回は録音テープから書き起こした田中先生の講演録があります。当日のオーディオ機器不調から講演内容に若干の変更があり、正式な講演録としがたい抄録ですが、世話人三代川の責任でプリントいたします。別添資料を参照ください。